

男子の看護系大学への進学動機

塩野悦子、寺山範子

宮城大学看護学部

キーワード

男子看護学生、看護大学、進路選択

male nurse student, nursing university, university selection

要 約

本研究は、看護大学男子学生の進学動機を明らかにし、また女性の多い看護職へ男子が参入する思いを明らかにすることを目的に、入学直後の男子看護大学生 9 名に半構成的インタビューで調査を行い、記述的に分析した。看護を選んだ理由は、医療系志向・アンチサラリーマン志向・ヒューマニティ志向・適性の自覚・ケア体験・患者体験・身近な看護婦の存在・消極的姿勢の 8 項目が分類された。また、看護大学進学への主な理由は、大学進学への当然性と複数の資格の取得であった。女性職とされてきた領域へ男子が参入することに対して、男子看護学生の思いは、幼少時からのジェンダーフリーの意識・看護が女性の仕事である固定観念からの解放感・看護職への男性の必要性が特徴的だった。周囲の人々の思いは、高校教師のポジティブ反応・親と友人のネガティブ反応が特徴的だった。

The Male's Motivation for Attending a Nursing University

Etsuko Shiono, Noriko Terayama

Miyagi University School of Nursing

Abstract

The purpose of this study was to describe the motivation of males for attending a nursing university, and their thoughts on entering a traditionally female profession. Nine male freshmen were interviewed using open-ended questions. We found their motivations to be as follows; medical oriented, humanity oriented, anti-salaried-worker oriented, self-awareness of aptitude, care experience, patient experience, familiarity with a nurse, and other motivations not concerned with nursing. Without having considered other possibilities, most male students, attending a nursing university, wished to obtain licenses. Regarding conditions leading up to their entrance into a primarily female profession, we observed three trends: gender equality from childhood; a sense of freedom from the fixed idea that nursing is only for females; the need for males in the nursing profession. Another important factor was the reactions of the people around them. Parents and friends tended to exhibit negativity, but high school educators reacted positively.

1. 問題の背景および研究の目的

歴史的に看護は女性の職業であるというイメージは根強いが、男子看護学生数はわずかながらも年々増えている¹⁾。特に看護系大学への男子平均入学者数は増加しており、昭和63年度では0.5人であった²⁾が、平成10年度は3.56人になり、11年間で約7倍になっている。表1は平成10年度の看護系大学の男子学生数を調べたものである。

今後さらに増えるであろう男子看護大学生について、大学教員の立場として認識をあらたにする時期が到来しているものと思われる。男子の看護志望動機や男子が看護に進むことへの周囲の反応についての質問紙調査がこれまで行われているが、対象が3年課程の看護婦養成機関（短大を含む）の学生³⁾や看護士⁴⁾で、看護系大学の男子を対象にした面接による調査は本邦ではない。

男子の看護系大学への進学が増えた背景には、看護系大学数の増加はもちろんのこと、最近の不安定な経済情勢が職業選択の社会通念にも影響を及ぼし、専門性の高い職域が求められ、その中でも高齢社会を意識した看護・福祉職を選択する男性が増えることは大いに予測される。メディアにおいても臨場感あふれるような看護・医療現場を題材にしたものが放映・出版され、男女を問わず情報は流れている。さらに社会的風潮として、性役割的に男女が均等であることや男性が伝統的な男らしさのステレオタイプに固執しない生き方が是認されてきていることなど⁵⁾⁶⁾も影響していると思われる。しかし男女均等の法的整備がなされていても、男女の性差による現実的な問題への対処には至っていない。女性が男性社会に参入していく場合には非常に賞賛されるものの、男性がいわゆる看護のような女性社会に参入する場合において、社会的認知度はまだ低い。Luther (1988)⁷⁾は看護はきわめて性差別の強い専門職と述べている。いわゆる女性職としてみなされてきた看護に男子が参入してくるときに、当事者はどのように思ったり、またその周囲の人々はどのように思っているのだろうか。

看護教育においては女性教員が圧倒的に多数を占め、男子看護学生のロールモデルになりにくい。Rogness⁸⁾は、男子看護学生は孤独と淋しさ、そして十分な行動モデルがないことに対処しなければならず、他人の無知とステレオタイプに対応せざるをえないことを述べ、看護展望編集部の調査⁹⁾では、

学生の時に困ったことの一つとして「男だから」という看護教員や臨床場面での対応について述べられ、男子看護学生特有の意識や問題が示唆されている。男子看護学生の特有の意識や問題を理解することは、男子看護学生が柔軟に問題を乗り越え、持っている資質を十分に発揮できるような環境を整えることにつながると考えられる。

そこで本研究では、今年度入学した看護大学男子学生に半構成的なインタビュー調査を行い、男子の看護系大学への進学動機を明らかにし、また女性職とされてきた領域へ男子が参入することへの思いを明らかにすることを目的に、記述的な研究を行った。

2. 研究方法

対象は平成10年度に入学したM大学看護学部の男子学生（第1学年）9名で、研究の趣旨を説明して同意を得た後、平成10年5月に半構成的なインタビューを実施した。面接は研究者2名とそれぞれの対象者で行い、所要時間は約40～60分であった。

インタビューでは、男子が看護系大学に進学した動機としてまず、職業として看護師を選んだり、あるいは看護学を学ぼうと思った経緯や動機について、そして専門学校や短大ではなく大学を選んだ理由を質問した。さらに一般的に女性の仕事とみなされている看護に参入してきたことに対して、対象者本人がどう思っているか、また周囲の人々がどのように思っていたのかを質問をしてデータを収集した。その際、許可を得て録音し、逐語で記録した。得られた記述データから、本研究の目的に関連する陳述を抜粋し、本質的な意味をもつと考えられる単位ごとに分類し、カテゴリー化し分析した。倫理的には個人が特定できる状況の記述においては省略し、記述内容を対象者に確認し、許可を得た。

3. 結 果

1) 男子の看護系大学への進学動機

(1) 看護を学ぼうと思った動機

職業として看護師を考えたり、看護を学ぼうと思った理由や経緯などから、男子の看護への進学動機として、医療系志向(7名)・アンチサラリーマン志向(7名)・ヒューマニティ志向(7名)・適性の自覚(5名)・ケア体験(5名)・患者体験(3名)・身近な看護婦の存在(3名)・消極的姿勢(2名)の8カテゴリーが分

表1 看護系大学の男子学生数（平成10年度）

	看護系大学名（女子大学は除く）	1 学年	2 学年	3 学年	4 学年	合計数
1	札幌医科大学保健医療学部看護学科	1	4	0	3	8
2	北海道医療大学看護福祉学部看護学科	10	5	9	6	30
3	旭川医科大学医学部看護学科	2	0	3		5
4	弘前大学教育学部特別教科教員養成課程	0	0	0	1	1
5	岩手県立大学看護学部看護学科	4				4
6	宮城大学看護学部看護学科	10	3			13
7	山形大学医学部看護学科	3	1	2	2	8
8	福島県立医科大学看護学部看護学科	3				3
9	茨城県立医療大学保健医療学部看護学科	2	1	0	0	3
10	国際医療福祉大学保健学部看護学科	13	10	14	10	47
11	群馬大学医学部保健学科看護学専攻	4	4			8
12	千葉大学看護学部看護学科	10	2	2	1	15
13	東京大学医学部健康科学・看護学科	*	*	3	13	14
14	東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻	4	1	1	1	7
15	東京慈恵会医科大学医学部看護学科	1	0	1	0	2
16	東京都立保健科学大学保健科学部看護学科	1				1
17	杏林大学保健学部看護学科	5	3	2	1	11
18	北里大学看護学部看護学科	8	8	5	8	29
19	東海大学健康科学部看護学科	3	8	5	9	25
20	富山医科薬科大学医学部看護学科	2	3	1	1	7
21	金沢大学医学部保健学科看護学専攻	5	5	4		14
22	福井医科大学医学部看護学科	1	5			6
23	山梨医科大学医学部看護学科	2	1	4	5	12
24	山梨県立看護大学看護学部看護学科	1				1
25	長野県看護大学看護学部看護学科	2	2	3	2	9
26	聖隷クリストファー看護大学看護学部看護学科	3	0	5	5	13
27	浜松医科大学医学部看護学科	3	1	3		7
28	静岡県立大学看護学部看護学科	1	4			5
29	藤田保健衛生大学衛生学部衛生看護学科	5	0	4	1	10
30	愛知県立看護大学看護学部看護学科	4	2	2	2	10
31	名古屋大学医学部保健学科看護学専攻	5				5
32	三重県立看護大学看護学部看護学科	2	3			5
33	三重大学医学部看護学科	1				1
34	滋賀医科大学医学部看護学科	1	2	2	2	7
35	大阪大学医学部保健学科看護学専攻	5	2	4	5	16
36	大阪府立看護大学看護学部看護学科	1	2	3	1	7
37	兵庫県立看護大学看護学部看護学科	4	4	3	6	17
38	神戸大学医学部保健学科看護学専攻	3	5	5	2	15
39	神戸市看護大学看護学部看護学科	1	1	4	0	6
40	川崎医療福祉大学医療福祉学部保健看護学科	5	4	3	4	16
41	吉備国際大学保健科学部看護学科	3	3	3	5	14
42	岡山県立大学保健福祉学部看護学科	1	1	1	3	6
43	広島大学医学部保健学科看護学専攻	3	3	2	1	9
44	広島国際大学保健医療学部看護学科	12				12
45	山口県立大学看護学部看護学科	0	2	2		4
46	香川医科大学医学部看護学科	0	2	4		6
47	愛媛大学医学部看護学科	4	1	3	2	10
48	高知医科大学医学部看護学科	4				4
49	久留米大学医学部看護学科	9	7	2	4	22
50	産業医科大学産業保健学部看護学科	0	2	1		3
51	佐賀医科大学医学部看護学科	4	3			7
52	九州看護福祉大学看護福祉学部看護学科	11				11
53	大分医科大学医学部看護学科	1	1	4	2	8
54	大分県立看護科学大学看護学部看護学科	2				2
55	宮崎県立看護大学看護学部看護学科	8	9	0	0	17
56	熊本大学教育学部特別教科教員養成課程	0	1	0	0	1
57	琉球大学医学部保健学科看護学専攻	*	*	8	4	12
合 計		203	131	127	112	571
平均人数		3.56	2.3	2.23	1.96	10

(名)

注) *は教養課程 空欄は新設校で学生の在籍なし

類された。()内はその項目に該当した人数(重複回答)を示している(以下同じ)。

① 医療系志向

《医療系志向》とは、医師・薬剤師・看護・臨床検査・理学療法・作業療法など医療系職種を志望すること。これは、看護を考えるようになったこれまでのいきさつを述べてもらうと、男子が看護系大学への進学を決定するまでのプロセスには、医療系の仕事につきたいという気持ちを抱いたことがある者が多かった。その発端の時期は小学校が1名、中学校が4名、高校が2名であった。医療系の中でも、医師が4名、その他が3名であった。

② アンチ・サラリーマン志向

《アンチ・サラリーマン志向》とは、主として営利を目的とする会社組織の中の人間とは反対の職業を望むこと。「サラリーマンにだけはなりたくなかった。就職活動して上司の機嫌をとって同じ会社に定年までいて何事もなく定年退社して、そういうのが嫌でした」、「会社のプロジェクトは一つの型に決めています、医療系の問題は答えがない。患者さんに対してその場の一人一人の対応にまかせられる。答えを自分で見つけなきゃならない仕事だから、そういうことができるかなと思った」、「働き詰めで疲れている父を見て会社員にはなりたくないというのがあるし、専門的な資格を活かせることが大きい」「サラリーマンよりは手に職」と、自分の考えるサラリーマンの仕事への抵抗を示しながら、看護職の特性をイメージしていた。

③ ヒューマニティ志向

《ヒューマニティ志向》とは、人と接するのが好きであり、人のために仕事をしたいと望むこと。看護を選んだ理由の中に「看護は人と接することができるので」、「看護者が患者のそばに一番いられると思った」、「人のためになるので」、「医者は病気を治すが看護は精神的ケアをしようと思った」、「看護に関する本を読んでいくと、心のケアにひきとめられた」など、対人間のヒューマニティあふれる仕事と考えて選択していた。

④ 適性の自覚

《適性の自覚》とは看護職に向いている性格や行動を本人が認めて表明していること。「やさしくて性格的に合っていると母親からいわれていた。でも決めたのは自分」、「姉から何かをつくったり、人と出会ったりするのが向いていると言われていた。おばあちゃん子だったので、お年寄りと話するのが好き。けがしたり、痛がっていたりする人を見ると、すぐに大丈夫かなと思って駆けつけたりする方だと思う」、「母親が働いているので小さい頃から家の手伝いをよくしていた。性格的にも合っていると言われる。具体的に考えたのは高1で、看護以外に迷ったことはない」と述べており、看護師になる適性を周囲の意見を取り入れながら、自分自身で自覚し、決定していた。

⑤ ケア体験

《ケア体験》とは自分が看護体験やボランティア活動などで、実際に誰かをケアをする立場にたったことがあること。「高2の夏に看護体験をして、患者さんと話をしたりした。すると患者さんが手を握ってきたり貴重な体験をした」、「ボランティア体験で老人と話をしたりしているうちに自分に向いているのではと実感した」、「身内の介護体験をして、寝返りの手伝いなどをしていた。病院に入院した時には、そこで看護の現場を通してすごいなあと思った」など、高校時代に誰かを実際にケアしたという体験は、看護選択理由の中でも特に決定的な要因として述べられていた。

⑥ 患者体験

《患者体験》とは、自分が病気・事故などで実際に入院し、看護ケアを受けたことがあること。「普通の人だったら経験できないことを生かせると思った」、「入院をして看護への進路を考えた。入院中は理解をしてもらえないこともあったので患者の痛みをわかる看護師になりたいと思った。男だったら男の看護師にしか言えないこともある」、「入院した時の、隣りの患者が危篤状態で、その患者への看護婦の対応に感銘した。話しかけても何も返ってこないんですが、家族の人が泣いているのを慰めていたんですよ。人間て理屈

じゃなくて感情で動くじゃないですか、そういう人間を相手にして慰めたりできるのがカッコいいなあと思いました。」と、入院した時の患者サイドに立った貴重な出来事が看護選択の大きな動機になっていた。

⑦ 身近な看護婦の存在

《身近な看護婦の存在》とは自分の周辺に看護婦が存在し、容易く情報を入手できる環境にあること。「母親が看護婦で大変だなあと思っていた。大変でもどうせならやりがいのある仕事がいい」、「知人の看護婦の話を聞いて、患者さんと直接接することができる仕事だと思った。それからいろいろ調べ始めて、だんだんいいなあというのが膨らんできた」、「看護大学の学生から、男子が看護学部でどう感じるかやっているかを聞いていた。いつも4、5人かたまっているが、それぞれ目的をもって結構やれているらしい」と述べており、日常の中で看護の現場の話を聞いていた。看護師が身近にいたものはいなかった。

⑧ 消極的姿勢

《消極的姿勢》とは、看護学部へ進学する決定的理由がないままに入学していること。「看護をやりたいというのではなく、看護でやっていけそうだなあと思っているだけ。まだ自分でも整理ができてない。もしだめだと思ったら、また違うところに変えればいい」と、まだ自分が本当に看護をやりたいことを表明していない学生がいた。また他の医療系の受験に失敗したため看護学部へ進んだ学生は「今までは看護について全然知らなかった。看護は医者のお手伝いさんで、専門職に見えなかった」と述べていた。しかし「看護する人が一生懸命働くことで、病人が早く治ったりすることもあるようだ」と入学後の授業を通して、看護を学習していく意義を見つけていた。このように看護を志望した経緯の中に、看護を選んだ決定的な要因が見当たらないまま消極的な姿勢で入学し、入学後に看護を学びながら模索している学生もいた。

(2) 看護系大学を選んだ理由

男子が3年課程の専門学校や短大へは進まず、看護系大学へ進学した理由に対して、看護師に

なりたかったので看護学校でもよかったと述べたのは1名で、他の8名は4年制大学だからということで選択し、進学校だったので大学進学は当然(4名)、看護師にならなくても大卒資格があれば役立つ(4名)、保健士資格が取得できる(2名)、技術より思考過程や知識が学べる(2名)、M大学には医療系以外の学部があり、ユニークな感性を吸収できる(2名)などの理由が述べられた。

2) 女性の多い看護職に男子が参入することへの思い

(1) 男子看護学生の思い

本研究の対象者において、いわゆる看護が女性の多い職業であることに対して少しでも違和感を感じていると表明した者はいなかった。むしろ看護は女性の仕事であるという固定観念がかなり薄れていることが特徴的だった。その特徴を説明するにあたって、幼少時からのジェンダーフリーの意識(5名)、看護＝女性の仕事という固定観念からの解放感(4名)、看護職に男性が必要と思うこと(2名)の3項目が抽出された。

① 幼少時からのジェンダーフリーの意識

ジェンダーフリーの概念は、男女平等という用語が制度や待遇面での男女不平等の撤廃をテーマに使われてきたが、性別に関して人々が持っている“心のあり方”をテーマにするために用いられた言葉。したがってジェンダーフリーとは、人々の行動を不自由で不幸せなものにしてしまうネガティブで固定的な性別の意識や行動の呪縛から自由になることを意図している。

「両親が共働きで、小さい頃から料理などは苦なくやる方だったので、女性の多い仕事に対して全然違和感を持たない」、「両親が共働きで、小さい頃から男も女も関係ないと育てられてきた。父親もまめな方で家事を手伝うのは当たり前」、「幼稚園から近所に男の子がいなくて女の子とばかり遊んでいた。女性の多いことには抵抗ない」と幼少時からのジェンダーフリーの意識という観点から、女性の多い領域へ参入することへ抵抗がないことを説明をしていた。この項目に該当したのは、

共働き家庭4名（対象者9名のうち共働き家庭は7名）と共働きでない家庭1名であったが、共働き家庭においては父親は日常的に家事を担当していた。

② 看護＝女性の仕事という固定観念からの解放感

「今まで女の人しかいなかったのに、看護師の存在を知って、それができるとことがすごいと思った」、「男の人は医者だけだと思っていたから、そういう職に男も就けるということを知った時、すごくうれしかった。」「本を読んで、男子が精神科以外にも看護師としてありうることを知った。それを知ったことは自分にとって非常に大きいことだった」と、看護師の存在を初めて知ったことや看護師が精神科だけではないことを知ったことを非常に喜び、これまで看護は女性だけのものという固定観念に縛られていたことからの解放感を述べていた。また「今までこれが男の職業とは思わなかったが、心のケアは何で女の人だけなんだろうと思った。今まで心のケアは女の人のものであると捉えた自分をもう一度考え直してみた。看護は男も女も関係ない」と高校時代までにとらわれていた固定観念に疑問を持ち、男子も看護ケアをすることができることへの発想の転換について述べていた。

③ 看護職に男性が必要と思うこと

身近に看護婦のいる学生は「看護は女性ばかりでやっていけるのかなあとと思っている。男ももっと入るべきである」と述べ、患者体験のある学生は「男（の看護者）じゃないと患者として話せないこともある」と述べ、ごく少数意見でその理由は漠然としているものの、看護職には男性の存在が必要であるという観点から、女性の多い職業に参入する思いを述べていた。

(2) 周囲の人々の思い

女性の多い看護職に男子が参入することに対する周囲（両親・兄弟姉妹・友人・高校教師）の思いとして、高校教師のポジティブ反応（9名）・親のネガティブ反応（6名）・友人のネガティブ反応（5名）の3項目が特徴として分類さ

れた。

① 高校教師のポジティブ反応

「看護学部を受けた男子は他にいるが、受かったのは俺だけ。珍しいから、選んだ理由を今後の参考にしたいからといわれ、いろいろ話した」、「高校で初めてなので看護師のホープと言われた」と、全対象において高校教師は看護師を志望したことへポジティブな反応を示していた。なお対象者全員の出身高校では男子が看護学部へ進学したのは初めてであった。また「女の中で大変だと言うかと思ったけど、言わなかったですね」、「最初は驚かれると思ったが、いいんじゃないかと言われた」と、対象者自身が、予想外の教師の好反応に驚いていた。

② 親のネガティブ反応

対象者の過半数において、両親あるいはどちらかの親に看護職への進路を反対されたり、反対ではないが何らかの抵抗を受けていた（両親2名、母親3名、父親1名）。

その記述内容は、「両親が反対。看護師ってどんな仕事なんだ。結局看護婦と同じで注射したりそんな仕事でしょって言われた」、「母親が反対。他の医療系への進路のときは文句を言わなかったが、看護に変えた時、看護は3K、誰だって女性に看護をされる方がいいと言われた。（入学後）母親があまり周囲の人にしゃべろうとしない。〇〇看護大学という名前じゃないからまだましと言っていた」、「両親が反対。看護はきつくて、給料も安く、子どもができたらしどうするの?と言われた」、「母親が反対。やめた方がいいと言われた。ためこむ性格なので、患者さんと接して間違っってミスしたら絶対立ち直れないからと。母には手堅く公務員になってくれって言われた。妹は一応賛成してはくれたが、お兄さんはどこの大学に行ったの?と聞かれると、看護学部って言いづらいと言っていた」、「母親は反対ではないが、大変なんじゃない?といていた。看護師っていうとやっぱり精神科の職場っていうイメージがあるからだと思う」などである。「看護職自体への偏見」・「女性の職業であることへの懸念」・「看護師＝精神科の固定観念」などの理由により、親

はネガティブに反応している傾向が強かった。

③ 友人のネガティブ反応

多くの友人からは、看護を選択したことに対して、「へえー！と最初は必ず驚かれ、その次にいいんじゃない？とくる」、「家族以外には必ず女性の職業だというリアクションを受ける。友達に言ったら、えー！といわれる。男もなれるのー？とも聞かれた」、「大丈夫か？といわれた」、「マジなの？看護を選んだのは何なの？ってよく聞かれる」、「おかしいんじゃないの？と言われた。女の子が目当てで選んだのかまで言われた。自分の生き方を否定されているようで嫌な気持ちになりましたね」など、女性の職業であることへの懸念から「驚き」「心配」「疑問」「冷やかし」の反応を受けていた。

4. 考 察

1) 男子の看護系大学への進学動機について

男子が看護の道を考える際には《医療系志向》が基盤となり、その後看護へと移ってくる場合が多い。Manninoによる男子の看護選択理由の調査¹⁰⁾では、医学部に入りたいと思ったが経済的に無理だったという項目があげられている。これに関してStephen¹¹⁾は、このデータは経済的制約により目標である医師になれない代理作用として看護を選んだ回答者の隠された願望も表わしている、と解釈している。その点について本研究では言及できないが、男性が看護職を選択するための第一段階として、多くの場合、男性が就きやすい医療職種から考慮していくのではないかと考えられる。

本研究の多くの男子看護学生がサラリーマンという響きには抵抗を示していたので、《アンチサラリーマン志向》というカテゴリーを分類しているが、この中には3つの意味が含まれているのではないかと考えられた。1つに会社組織に拘束され、マニュアル化された人生への反抗心、2つに不安定な経済情勢の煽りをあまり受けない、専門的な技術を取得した職種を現実的に考えていること、そして3つに看護とは、会社組織からの命令によるものではなく、自分の判断に任せられる自律性の高い職種であるイメージが強いことである。波多野他の調査¹²⁾によれば、看護を目指した直接的動機では、男女共に「技術・資格の取得」が首

位を占め、瀧川他の調査¹³⁾においても「安定した技術職」のための看護職選択と述べられていることがこのカテゴリーに類似する。しかし男子が将来の進路を考える選択肢にはサラリーマンという大きな岐路が存在し、それが女子よりも重くのしかかっているのではないかということ、そして本研究の対象の反応を第一に考慮した結果、このような複合的な意味のカテゴリーとして抽出した。

《ヒューマニティ志向》に関しては、男女を問わず看護志望の第一の理由として多くの研究で述べられている。

本研究の対象者は、家族から看護職に就く適性を認められたり、またケア体験を通して自分のケア能力への《適性》の発見をしている。その適性とは、性格がやさしかったり、人と接するのが楽しいことだったり、他の男友達と比べて世話好きだったりすること、また女性の中でも違和感を感じないで平気であることなどが含まれると思われる。波多野他の調査¹⁴⁾では、男子は女子に比べて「自分に向いている」と考えて看護への進路を選んでいと述べており、これはやはり女性が圧倒的に多数を占める看護という領域に男子が参入するにあたって、向いているか向いていないかは大きな分かれ道であり、適性の自覚は看護への進路を考える男子にとって大きな要素となるのではないと思われる。

《ケア体験》や《患者体験》は身体化された現象であり、そこで得られた満足や感動あるいは喪失の経験は、当事者の感情を動かす決定的な要因となっている。厚生省と日本看護協会の協賛で1991年より“ふれあい看護体験”(高校生対象)が全国で展開されていること、ボランティア活動の意識が高まっていることなどで、ケア体験の機会が日常の中で提供されていることは非常に影響が大きい。

《身近な看護婦の存在》は、看護を現実的かつ肯定的に日常の中に受けとめることを容易にし、男子の看護への垣根を低くしている。Bush¹⁵⁾は看護師になろうと決心するのに影響を及ぼす重要他者の存在をあげ、波多野他¹⁶⁾は看護師の情報源は家族と知人などパーソナルな情報による者が半数を占めると述べている。本対象においては身近な看護婦の存在のある者は少ないが、最近の看護に関するマスメディアの情報がこの要因の役割も

担うほど、充実してきているのかもしれない。

《消極的な姿勢》のカテゴリーの学生（看護選択の決定的理由がないままに入学した学生）を振り返ってみると、1人は決定的なケア体験や患者体験がなかった。もう1人は身近な看護婦の存在がなく、他学生と比べると、看護は医師の補助という意識が強かった。すべての学生が確固たる信念を持って入学しているのではないことは当然であるが、このような点からも、男子が看護を選択するにはさまざまな要因が絡み合っているのではないかという様相を色濃くしている。

これらのカテゴリーを関連させてみると、《医療系志向》《アンチサラリーマン志向》《ヒューマニティー志向》は、男子が看護を学んでみようという基盤であり、どのような職業に就いたり、どのような生き方をするのかの方向性を示しているように思われた。さらに《ケア体験》《患者体験》《身近な看護婦の存在》は、看護の現場を実体験で学んだり、現実的な看護の日常を聞いたりすることで、男子にとって看護への垣根を低くする要因となり、《適性の自覚》がより高まり、男子が看護を学ぼうとすることに至るのではないかと考えられた。さらに、男子の看護への垣根を低くするには、看護系大学の増加・ジェンダーフリー教育の広がり・高齢社会による福祉職の需要増加・看護に関するマスメディアの増加などの社会的要因も大きく関与していると思われる。

大学を選んだ理由から考えてみると、4年制大学への進学は当然のことである学生がほとんどで、その大多数は大卒資格や保健士資格取得のためであり、他の専門領域と同様に卒業後の進路選択には多少広がりがあるという自由度が強く感じられる。看護学校を出て臨床での看護師の道しかないという束縛感がないことは、看護師になるのを完全に決心していない者にとっては救いになるのかもしれない。平成6年の保健士制度の施行は男子の看護への道に拍車をかけたとは断定できないが、看護系大学への男子入学者数増加の一因になっているとも思われる。

一方、田口¹⁷⁾によれば、最近の看護大学数の増加に伴い、看護分野は一つの医療関連分野の進路先として存在し、理系の一般分野を志望する大学進学希望者が看護大学を併願校とすることが最近の受験背景で目立ってきたという。本研究で分類

された男子が看護を学ぼうとする進学動機は、過去の調査とあまり変わらないが、唯一《消極的な姿勢》の項目においては、看護大学に進学した男子学生の最近の受験背景が影響していることも憶測できる。今後も看護大学の男子数は増えていくと思われるが、本来看護師志望ではない男子学生も存在することを加味し、そのような学生も看護に魅力を感じれるような教育のあり方を考えることは私たち大学教員に与えられた一つのチャンスとして受けとめていけばよいのではないだろうか。波多野他¹⁸⁾は男子看護学生の中退に関して、半数が1年次に集中し、主に進路変更と学業不振によるものと調査結果を出している。しかし教育側からの意見であり、本当の理由は学生本人に聞かないと明らかにならないと述べている。

2) 女性の多い看護職に男性が参入することへの思い

(1) 男子看護学生の思い

Bush¹⁹⁾によれば、男子看護学生は男性の社会的役割に付随する潜在的葛藤ができるだけ少ない専門領域を選択する傾向にあると述べている。70年代においては男性は伝統的な社会的役割に付随して生きる方が自然であった。しかし90年代になってから、男らしさへのこだわりがむしろ男性本来の人間性を束縛してきたのではないかと考えられてきている²⁰⁾。細谷²¹⁾が男らしさの基本的構造として①国家と市民社会での役割期待、②女性の役割との対極性をあげている。「男は外で働き、女は家庭を守る」ことについて賛成する若者の割合は世界10カ国のうち日本はフィリピン、ロシアに次いで第3位である。国際的にも日本は性によるステレオタイプが根深い国柄であることは事実だが、日本の中ではその賛成意見の割合は明らかに年々減少している²²⁾。本研究の対象者もそのような社会の変化を自然に感知しているのか、看護＝女性の仕事という固定観念からの解放感を感じたり、職業選択における性差へのこだわりはほとんど見られていない。

特に共働き家庭などではジェンダーフリーの意識が浸透しやすい傾向にあるのかもしれない。しかし、Stephen²³⁾は看護の専門職に入った男性の価値観と両親の関係への認識について、看

護を選ぶ男性は父親との情緒的な距離があることに影響を受けている見解を述べている。また Lemkauの研究²⁴⁾においても、男性の職業とされる仕事に就く男性と比べて、女性の職業とされている仕事に就く男性は、職業選択に女性の影響を受けていることが多く、父親との情緒的距離があると述べている。家事をこまめに手伝う父親の影響を受けていると思われた本研究とは意見を異にしており、今後注目していかなければならない。

男子看護学生にとって、看護への垣根を低くさせている背景には、さらに、看護に関するマスメディアの情報の伝え方の変化や男子看護学生のパーソナリティの要因が関連していると考えられる。以前は3 K的看護としてイメージが強く伝えられていたが、最近は心のケアを重視する伝え方にシフトし、一般にも看護の本質が伝わる機会が増えている傾向にあると思われる。男子看護学生のパーソナリティに関する研究では、男子短大生と女子短大生との類似より、男子看護学生と女子看護学生のパーソナリティ像の類似が強いこと (AldagとChristiansen)²⁵⁾、男子看護学生の価値観が女子看護学生の価値観に類似していること (Garvin)²⁶⁾ などが述べられている。すでに看護を選択するプロセスの中において、男子看護学生のパーソナリティ特性は、女子看護学生に類似しており、性役割意識にも近いものがあると憶測される。さらに BrownとStones²⁷⁾ は、男子看護学生は通常の集団より明らかに外交的で神経質ではなく、女子看護学生との比較においても同様であったと述べている。

波多野他²⁸⁾ は男性が看護の仕事に大勢入ってくるようになって初めて、看護は専門職として社会から認識されるようになるのではないかと述べ、杉谷²⁹⁾ は男性看護者を増やすことは量的な問題解決だけではなく、特性あるサービスの提供、職場の活性化、専門性の確立の観点から、質的確保のうえでも重要な意義があると述べている。また堀江³⁰⁾ は看護師の役割を父性的役割、看護チームの活性化、男性患者の立場の理解と述べているように、看護における男性の必要性は今までも多く論じられている。本研究においては女性の職業とされてきた領域に男性が参入

する思いとして、看護の性差意識の固定観念が薄れていることや幼少時からのジェンダーフリーの意識がある一方で、看護への男性の必要性という性差別的な観点からの意見もわずかに見られている。意識の上では男女平等と感じていても、現実的には男女は違うという論点はさまざまな分野で平行線をたどっているが、バランスのとれた専門領域になるよう男女共に努力していかなければならないことは事実であろう。

(2) 周囲の人々の思い

親や友人がネガティブな反応を示す傾向が強いことから、高校教師の応援は看護を選ぶ男子にとって重要な支援となっている。波多野³¹⁾ によれば、女子と比べて父親・友人・高校教師による反対が多く、特に高校教師の反対の程度が高いと述べている。高校生の看護職への理解度調査³²⁾ では、男子の約5割、女子の約7割が「男女平等の時代だから良い」と看護師を認めているが、看護に関心のない男子ほど否定的な考え(「自分が患者ならいや」「なんとなくいや」)を示していた。高校の進路指導という立場からは、この看護大学増加という急速な変化へに対して戸惑いの意見³³⁾ も聞かれており、ポジティブな反応を示すという本対象者の高校教師の中にも、同様の事態が起きていることは大いに予測される。しかし、いずれにせよ親や友人の反応は長い間変わっていない。Bushの調査³⁴⁾ においても、看護師になることへの圧力は両親、主に父親からと述べている。本研究では比較的母親の反対の方が目立ち、先行研究結果と多少違いが見られるのは、現代の家族関係のあり方とも関連すると思われる、非常に興味深い。

社会的要望に応えようとする教育現場においては改善の兆しが見られるが、「看護＝女性の仕事という固定観念」「看護職自体への偏見」「看護師は精神科という固定観念」に関する男性看護者へのマイナスイメージは未だ、対象者本人の身近なところで存在している。入学前の看護を選択する経緯の中でも、さまざまな葛藤やゆらぎを感じてきているのが現状である。

5. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は一大学の少人数に限られたものであること、女子看護学生との差別化が明らかなでないこと、質的な研究者やこのテーマを専門としている研究者からの指導を受けていないことにより、一般化には程遠く、今後さらに妥当性を高めていかなければならない。

看護学生は、依存から自立への過渡期である青年期にあたり、親から独立することもこの時期の課題の一つである³⁵⁾。特に男子看護学生は、家族や友人など親密な関係者との間では葛藤する場面が多いかもしれないが、他者とは違う自己を発見し、看護の魅力を探索しようと入学してきている。入学後も抱いてきた信念を持続できるよう看護教育の場においても理解を示していくことは重要である。看護系大学の男子数がかんりの勢いで増加しているが、まだまだ女性中心の看護職のステレオタイプの思考は、看護教育の現場にも存在している可能性が大きい。今後は、入学後の学習過程においても男子看護学生の特有の意識や問題を明らかにしていく必要があると思われる。

引用文献

- 1) 小野寺杜紀、波多野梗子：全国看護婦養成施設における男子学生の教育とその実態－教務主任の意見－、日本看護学教育学会誌、4(1)：51-60、1994
- 2) 前掲書1)
- 3) 波多野梗子、小野寺杜紀：男子看護学生による看護職選択－女子看護学生との比較－、看護展望、21(5)：94-101、1996
- 4) 看護展望編集部：アンケートにみる看護師の意識、看護展望、17(4)：434-444、1992
- 5) 伊藤公雄：男性学入門、作品社、1997
- 6) 鹿島敬：男の座標軸－企業から家庭・社会へ－、岩波新書、1996
- 7) Luther P. Christmann (波多野梗子、小野寺杜紀訳)：“Men in Nursing”、看護師、看護研究、24(1)：87-95、1991
- 8) Rogness, H. : A Student Surveys his Classmates, Nursing Research, 24 : 303-305, 1976
- 9) 前掲書4)
- 10) Mannino, S. F. : The Professional Man Nurse : Why He Chose Nursing, and Other Characteristics of Men in Nursing, Nursing Research, 12 : 185-187, 1963
- 11) Stephen D. K. & Sandra P. T. (川野雅資訳) : “Men in Nursing : Value and Parental Ties”, 看護における男性－価値観と親の結びつき－, こころの臨床 a・la・carte, 3月 : 48-54, 1996
- 12) 前掲書3)
- 13) 瀧川薫他：大学病院に勤務する看護師の実態調査－職務の現状と看護職選択の経緯－, 病院管理、(1) : 41-49, 1994
- 14) 前掲書3)
- 15) Bush, P. J. : Male Nurse : A Challenge to Traditional Role Identities, Nursing Forum, 4 : 391-405, 1976
- 16) 前掲書3)
- 17) 田口正男：看護大学への疑問－看護教育を大学化していく中で、忘れてはならないことはなにか－、看護教育、37(7) : 520-524, 1996
- 18) 前掲書1)
- 19) 前掲書15)
- 20) 前掲書5)
- 21) 細谷 実：性別秩序の世界、マルジュ社、1994
- 22) 総務庁青少年対策本部編：世界の青年との比較からみた日本の青年－第5回青年意識調査－、1994
- 23) 前掲書11)
- 24) Lemkau J. P. : Men in Female Dominated Professions : Distinguishing Personality and Background Features. Journal of Vocational Behavior, 24 : 110-122, 1984
- 25) Aldag, J. & Christiansen, C. : Personality Correlates of Male Nurses, Nursing Research, 4 : 375-376, 1967
- 26) Garvin, B. J. : Values of Male Nursing Students, Nursing Research, 25 : 352-357, 1976
- 27) Brown, R. G. S. & Stones, R. W. : Personality and the Avoidance of Cross-sex Behavior, Journal of Personality and Social Psychology, 33 : 48-54, 1976
- 28) 波多野梗子、小野寺杜紀：看護師の就業と男子看護学生の教育の現状－K県の実態調査をとおして－、看護展望、17(4) : 45-55, 1992
- 29) 杉谷藤子：看護師への期待－日本看護協会の見解－、看護展望、17(4) : 23, 1992
- 30) 堀江琢磨：看護師の役割についての一考察、神奈川県立看護教育大学校看護研究集録、55年度 : 215-222, 1981

男子の看護系大学への進学動機

31) 前掲書 3)

32) 石井裕美他：高校生から見た看護婦（士）への関心度
と社会的評価、福岡県立看護専門学校看護研究論文集、
19：1-12、1996

33) 前掲書17)

34) 前掲書15)

35) 服部祥子：青年期の心理と発達危機－看護学生を理解
するために－、看護教育、40(1)：12-19、1999